

# 優秀賞

『文字禍』 中島敦著

文学部 心理社会学科 4年 安田英広

私たちが、中島敦と聞いて思い浮かべるのは、漢詩が登場する難解な「山月記」と、真面目そうな青年の顔写真だろう。中島は「山月記」とともに、「文字禍」を雑誌『文学界』に発表したその年に、持病の喘息で亡くなった。彼は文壇に彗星の如く現れ、そして去っていった。そのため彼の主要な作品は、20作あまりしかない。

中島は、当時の日本人を主人公とした作品をほとんど書かなかった。「文字禍」はメソポタミア文明、アッシリヤを舞台にしている。ある老博士が、大王の命により、図書館に出た文字の霊について研究することになる。古代アッシリヤには紙が存在せず、書物といえば、粘土板に楔形文字を彫り付けたものであった。文字通り、文字に重みがある世界である。

博士は研究のなかで、文字が事物の影であること、人はその影を追うことで、事物そのものには触れられなくなってしまうことを発見する。しかし彼は文字の及ぼす害について研究しながらも、どこか畏敬の念を抱かざるを得ない。彼が文字の霊についての研究成果を、新たな粘土板に記すことに至っては滑稽でさえある。

人が文字を書くというときに、手で書くのには限界がある。それは疲れや痛みといった身体的限界だ。からだの弱かった中島にとって、書くことの限界はより切実なものだっただろう。身体的限界が、運命ともいえる、あまりにもナンセンスな切断によって定められているのだ。加えて知識人特有の自己批判癖もある。それらを掻い潜って作品を書くことはまさに、知を、文字を、粘土板に彫り付けるような途方もない作業である。だからこそ、彼の文章からは物質的な重みを感じられる。

翻って現代では、文字は入力するものになり、書くことの限界は彼方へと延長された。私たちは「これ以上書けない」という切断を、もはや忘れてしまった。世界中を覆うフェイクニュースを、ネットを中心に発信する人々には、身体的限界がない。あるのは定型的な記述と拡散だけだ。彼らは、文字の重みを見捨てて軽々と振り回し、人々の感情を煽り、大きな影響力を持つに至った。しかし果たして、文字の霊はそれを許すだろうか。私たちは文字を、言葉を通じて世界に触れる。それならば私たちが文字の重みを見捨てることで、投げ捨てているものは、ほとんど世界そのものなのではないか。

中島は戦前から戦中の、実感や共感の嵐が吹き荒れるなかで創作した。それにもかかわらず、彼の作品は現在でも全く色褪せていない。それは彼の作品から伝わってくるものが、知を、文字を、仰ぎ見る角度だからだろう。実感や共感が輝いて見えるのは、その時代だけだ。しかし、どのように世界を見るか、感じるか、その仰角は時代を越えて受け継ぐことができる。「知性」の本質は恐らくここにある。本作品は、文字が物質性を失い、知の価値が揺らいでいる、今だからこそ読まれるべきものである。